『浜松中納言物語』の唐土再考

――その風景の描き方を糸口にして――

越田　健介

一　はじめに

『浜松中納言物語』は、平安時代後葉、後冷泉朝の頃に成立したと目される王朝物語である。御物本『更級日記』の藤原定家による奥書の識語の記述から、作者は菅原孝標女とみるのが有力である。本作品には、作中人物の造型や筋書に『源氏物語』宇治十帖の影が濃密に認められる。また、『更級日記』と同様、「夢」が頻出するため、以上は『源氏物語』に耽溺するとともに、夢幻的な性格の窺える孝標女の執筆を推定する徴証とされているが、未だ確証には至ってはいないようである。

夙に知られるように、『浜松中納言物語』は首巻を逸している。現存する巻一以前の物語の経緯は、『無名草子』や『物語後百番歌合』、『風葉集』などに基づき復元が試みられているとはいうものの、その詳細が不明なところもある。ただ、唐の第三皇子に転生した父・式部卿宮と再会するべく、主人公・中納言が苦難を乗り越えて渡唐するという巻一の筋書には、『源氏物語』の桎梏に絡め取られながらも、どのように斬新な趣向を加えようとしたのかという創作に対する並々ならぬ気力をみいだすことができよう。尤も、唐や波斯国といった異国を舞台とする『宇津保物語』「俊蔭」巻のような先蹤はあるにしても、本作品のこうした果敢なとりくみは、王朝物語の諸作品に鑑みても特筆すべきことであり、当時の読者層の興味にも応え得るものとして評価を集めている。

以上のような事情から、従来、『浜松中納言物語』における唐土に関する議論は頻々となされてきた。ただ、研究の状況をふり返ると、早くに藤岡作太郎が「実にかの国の様を見聞せるものならば、何ぞ描写のかくの如く浅薄ならんや」と述べたのを皮切りに、唐土の描き方の粗雑さを論うものが目立つ。[1] 一方で、池田利夫氏は、物語における唐土の情景には相当の異国性があることを認めながらも、「この物語の異国描写は、総じていえば日本の風俗を最も踏襲しており、結局日

本と紛わしい唐土を創り出したに過ぎなかったが、実際にかの地を訪れもせず、漢籍も多くは読み込んでいなかった作者にとって、当然の帰結であった」と述べ、作者の困難に留保しつつ批判的に捉えているようである。[2] いずれにしても、当時、唐へ渡航するのは困難を極め、したがって作品中に唐の様相を精細に描きこむためには日常的に接し得た中国の故事や唐絵を参考にしたり、日本の景物や宮中の儀式に基づいたりするほかなく、作者をして至難のことであっただろうとは容易に想像がつく。無論、孝標女が作者であることを前提に、その出自、つまりは菅原氏が代々文章博士を輩出する学問の家系であることから、[3] 或いは、当時の貴族女性たちの間での漢籍に関する知識の程度から、[4] 本作品における唐土のありようも実は全くの無知で杜撰だとばかりは唾棄できず、その精確さや、或いは表現形成の基盤や姿勢を擁護する反論や指摘もなされてきた。[5]

しかし、くり返しになるが、異国への航海が困難である以上、未知の唐土を描くには、ある程度の知識と、それに裏付けられた想像力に頼るのはむしろ自然のことであり、[6] 唐のありようの粗雑さや精確さを議論の俎上に上すこと自体、非建設的だと言わざるを得まい。そして、『浜松中納言物語』の作者（それが、菅原孝標女かどうかはともかくも）の知識へと結び付けることで、却ってみえづらくなる物語のあり方というものもあるのではなかろうか。

そこで本稿は、従来の議論を参照しつつも、むしろ物語が唐という異国の舞台をどのように利用しているのか、そうしたストーリー展開を支える方法として唐土のありようを捉え、その再検討を試みるものである。その中で分析の糸口とするのは、人物の心情と密接に関わる唐土の風景[7]である。尤も、唐の景物や風景には、唐絵を参考とした形跡が如実にあり、そのようにすることによって「唐国らしさ」を演出しているのだ、とする議論は従来からなされてもいるところである。[8] しかし、このような曖昧さを残す、外形的な把握にもあらためて問い直すべき事柄は残されていよう。すなわち、本作品における唐土の風景に目を向けてみると、殊、異国に在るからこそ芽生える中納言の心情を語る装置として、それらが効果的に機能していくという様相を窺い得るのである。渡唐物語という本作品の方法を担保するものとしての唐土の風景について、まず主人公・中納言が長い船旅を終え、唐に至る箇所から分析を行い、その具体的な展開を探っていく。

二　日本を偲ぶ風景
――中納言に郷愁を促す唐土――

はじめに、本作品の唐土の風景がどのように展開するかを確かめておく。巻一は、中納言が、七月上の十日、唐の温嶺に到着したことを述べて始まる。入国後暫くして、中納言は、唐の第三皇子に転生した亡父との再会を果たすとともに、皇子の母として関わり合いを持った唐后への断ち難い思慕を募らせつつ日々を送る。一の大臣家の五の君とも親しみ、一方で「さんいう」（以下、諸注に倣い「山陰」とする）[9]の女（実は、唐后であると後に判る）との一夜の逢瀬、その後の不義の男君の誕生など、中納言在唐中の物語は、巻二以後の筋書をも左右する様々な要素を孕んでいるが、殊、本稿に関わってみておくべき点は、中納言が実に頻繁に唐土を転々としているということである。三

年間で、温嶺に始まって杭州、「こほうだう」、歴陽、華山、函谷の関、雍州（＝都・長安）の内裏、河陽県、洞庭、梅の満開に咲く山、桃源、山陰、長里、長河、蜀山、未央宮（年立順）に赴いている。尤も、温嶺から雍州までは旅程だが、三年の短さでも中納言が一箇所に留まりつづけず、彼方此方に移動をくり返すというあり方に目を向けるべきだろう。なぜなら、中納言が唐土を様々に往き来するということが、そのまま物語の舞台を拡充することに繋がるからである。そして、中納言がそこでいかなる風景に接し、そして何を思うのかを語る行文は、中納言の「目」を通して「心」を語るという、巻一における物語の一貫した叙法でもあるのだ。

このような素朴な事実をみすごしてはなるまい。その上で、早速、渡唐直後の顛末から検討を加えていく。些か長くはあるが、温嶺から函谷の関までの旅程を次にあげる。

孝養のこころざし深く思ひ立ちにし道なればにや、恐ろしう、はるかに思ひやりし波の上なれど、荒き波風にもあはず、思ふかたの風なむことに吹き送る心地して、もろこしの温嶺といふところに、七月上の十日におはしまし着きぬ。そこを立ちて、杭州といふところに泊り給ふ。①その泊り、入江のみづうみにて、いとおもしろきにも、石山の折の近江の海思ひ出でられて、あはれに恋しきことかぎりなし。

別れにしわがふるさとの鴉の海にかげをならべし人ぞ恋しき

それよりこほうだうに着き給ふ。いとおもしろくて、人の家ども多くて、日本の人過ぎ給ふとて、家々の人出でて見さわぐさまども、いとめづらし。歴陽といふところに船とめて、それより②華山といふ山、峰高く谷深く、はげしきことかぎりなし。あはれに心細く、「蒼波路遠し雲千里」とうち誦じ給へるを、御供にわたる博士ども、涙を流して、「白霧山深し鳥一声」と添へたり。

山越え果てぬれば、函谷の関に着き給ひて、日、暮れぬれば、関のもとに泊り給ひぬ。「この関は、鳥の声を聞きてなむ開くる」といふことを「しか」と聞きて、御供の人の中にいはけたるものありて、「いざこころみむ」とて、夜中ばかりに、鳥の声にいみじう似せて、はるかに鳴き出でたるに、関の人おどろきてその戸を開く。「いとよしなきことをしつるかな」と、人々言ひにくむを、君も聞き給ひて、「ふるき心、さすがにおぼえけるにこそ」と、うち笑ひ給ふ。

明くる日、この関に御迎への人々参りたり。そのありさまども、唐国といふ物語に絵にしるしたる同じことなり。

（巻一、三一―三二頁）

雍州を目指す主人公・中納言の一行の進路に合わせ、ここには六つの地名が集中してみられる。この点について小塩慶氏は、「それぞれの地名は物語の進行においては特別な意味はほとんど持たず、「中国らしさ」を演出するために日本人になじみ深いものが記号的に織り込まれたに過ぎない」[10]と指摘する。尤も、そのような思いを助長するのは、たとえば点線部にある、本作品中でしばしばくり返される「唐国といふ物語に絵にしるしたる同じことなり」といった、唐絵を例にあ

げて具体的な描出を省略する方法や、傍線部「おもしろし」や「めづらし」といった形容詞が頻出する点にもあるだろう。「おもしろし」とは、「特殊個別的な風景や状況に対面したときの感興をいう」[11]語であり、一方の「めづらし」は、稀なことだからひきつづいて目にしたいという語義である。[12] 非日常性を伴う情景に対する形容語であるという点、両語は共通する。市古貞次氏は、「「珍らし」といふ語を頻發して、ただわが國とは違ってゐるのだといふ印象を能もなく讀者におしつけようとしてゐるに過ぎない」[13]とまで酷評しているが、いずれにしてもこのような列挙やそれに伴う語のかさなり合いが、充分に異国性を演出し得ているかどうかには若干の疑問も残る。というのも、たとえば「こほうだう」では、唐の人々が中納言の一行を一目みようと家を出てきたと述べられてはいるが、それが唐に在ることを印象させるような効果を持っているとは言い難いからだ。また、函谷の関は六箇所中、もっとも長く筆が割かれているものの、当時の貴族社会には広く知れ渡っていた孟嘗君の故事をなぞるやりとりの一端であって風景は描出されず、ある種の固定的なイメージを喚起させるのに留まる。そして、温嶺と歴陽とは、宿所であることを示すのみで、その風景が全く描かれてはいないのである。

このように、来唐して間もなくの叙述に目を向けると、風景については殆どが具体性を欠いているのである。その一方、杭州と華山とはどのような風景が広がるのかが語られるとともに、そのありようがまた、母君や大将の大君を残してきた日本を偲ぶ契機にもなっており、他とは異なる描き方がなされているように思われる。

まず、杭州について。太線部①、杭州の「入江のみづうみ」を、中納言は「いとおもしろき」ものと思うが、その「みづうみ」こそが、散逸首巻の内容とされる、大将の大君との石山寺での逢瀬のとき目にした「近江の海」を思い起こさせるのだという。つまり、「おもしろき」風景が、「みづうみ」という日本を偲ぶ景物を媒介に、波線部のように「あはれにも恋しき」風景へと転じているのである。もちろんここで「恋し」く思うのは、大将の大君のことであろうし、さらに言うと、大君のいるまさに日本のことでもあろう。『浜松中納言物語全注釈』によると、「あはれに恋しき」の連語は「郷愁にかられる場合に用いられている」[14]という。同様に、華山についても、太線部②で峻嶮な風景であることを語り、破線部につづいてそれ故に「あはれに心細く」思う中納言のようすが窺える。そして『和漢朗詠集』下・行旅の中にある橘直幹の詩、「蒼波路遠し雲千里」を吟詠するのであるが、これは直幹が石山寺に参籠したときの詠だとする説もあるという。[15] 以上を踏まえているのだとすると、華山の山容が中納言をして石山寺での出来事を偲ばせたのだと捉えることもできよう。「博士ども」もまた、「涙を流して」中納言に応じるが、日本をひとりでに思うようすに共鳴しているものとみてとることができる。

以上、温嶺から函谷の関に至る旅程の風景についてみてきた。ここで明らかになるのは、異国性にもまして中納言の郷愁の方がいっそう情緒深い密度の濃さで描かれているということである。「唐国らしさ」は殆ど前景化されずに描出されるのに対し、むしろその唐土の風景を媒介に、日本を遠く離れ来た中納言の胸の裡、殊に日本を偲ぶ思いにここでは表現の力点が置かれているのではなかろうか。

そして、このような中納言に郷愁を促す唐土の風景は、実は巻一の

随所に描き出されてもいるのである。

年もはかなく暮れぬ。心から知らぬ世界に明け暮らすを思へば、心細けれど、あらぬ御さまの、いと幼くおはしましながら、人知れぬ昔の御心、変らぬさまにおぼしたる御かげに、よろづは頼もしうて過ぐし給ふ。年立ちかへりぬるあしたの空は、いづくも変らぬものなれば、霞める空もうぐひすの音も、「春や昔の」とのみ思ひまがへたるにも、去年のこのころの人々の御けしきども思ひ出づるに、あはれに恋しきなぐさめに、梅の木のかぎりあると聞く山を行きて見れば、遠くより風の吹き散らすに、にほひかをり満ちて、まことに異木はまじらず、ひとたびに咲きわたりて、ただ白山と見ゆる、

白妙に降りつむ雪と見えつるは梅咲く山の遠目なりけり

（巻一、五四頁）

渡唐してはじめて年が明けた。異国に暮らす心細さはあるものの、唐の第三皇子が、子どもの容貌でありながらも、父としての「昔の御心」で変わらずに接してくれるのを頼みに、不安もなく日々を送っているという。物語は、中納言の、このような〝父〟との再会後のありようを確かめつつ、つづいて異国で迎える新年の空のようすに話を転じていく。ただそれは、「いづくも変らぬもの」、つまり、日本も唐も殆ど同様で思いちがえる程だとして、中納言はそのような風景をみるにつけても、「あはれに恋しき」とあるように日本への郷愁に駆り立てられているのである。そして、故郷への恋しさを慰めるために「梅の木のかぎりあると聞く山」へと赴くのだが、一斉に咲き揃う梅のようすをみて恰も「白山」だと思う。この「白山」については、諸注によって「越の白山」を指す固有名とするか普通名詞とするかは判断が分かれているものの、さきの杭州や華山のように目の前の風景が日本の風景を喚起し、中納言に郷愁を促すという描き方が思い合わされるところではある。[16]

さらに、また異なる一例についてもみていく。

そのころ、二位の中納言、昔このところに住みける王子猷といふ人の、月の明かかりける夜、船に乗りつつ遊びし文作りけるところに、ゆかしうてものし給へるに、月いみじう霞みおもしろきに、花はひとつにほひ合ひたる夜のけしき、たぐひなきにも、住み馴れし世の空もかうぞあらむかし、と、今宵の月を見つつ思ひ出で給ふ人もあらむ。内裏の御遊びありし折々、去年の春、かやうに月の明かかりし夜、式部卿の宮に参りたりしかば、いみじう別れを惜しみ給ひて、「西に傾く」とのたまひしその面影、かたがた思ひ出づるに、涙もとどまらず。

あさみどり霞にまがふ月見れば見し夜の空ぞいとど恋しき

（巻一、六五―六六頁）

中納言は、当時広く知られていた「王子猷」の故事の舞台であるのに興味を惹かれて山陰へと足を延ばす。花の咲き誇る月夜の晴々とした風景の美しさに心を揺さぶられるとともに、それにつけても日本の空もきっとこうであろう、今宵の月を見て自身を思い出す人もいるで

あろうと思う。そして、「内裏の御遊びありし折々」や、「去年の春、かやうに月の明かかりし夜」のことをも思い出しては「涙もとどまらず」というほど胸懐に迫り、遂には「見し夜の空ぞいとど恋しき」という郷愁の情の滲む独詠へと繋がる。はじめ、中納言は中国の故事への関心から山陰へと足を向けたはずだが、そこで目にした風景によって却って郷愁に駆られていく。

これらの例からも明らかなように、本作品の唐土とは、単に「唐国らしさ」を演出するのが全てとは言えず、むしろ中納言の心情に合わせてその様相もおのずと変わっているのである。だから、必ずしも唐の珍奇な異国性ばかりをみいだすことは適当ではないだろう。ある眼前の景物がきっかけとなり、そこから日本の風景が自然と喚起されていく。そして、中納言の思い出の中にある日本と目の前の唐とがかさなり合って一つの像を結ぶのだ。このように唐土の風景とは、中納言に日本を喚起させる役割を負うことで、日本への郷愁を語る舞台装置となり得るのである。

思えば、中納言は、渡唐して一月も経たずに、唐土に対する素朴な印象を述べていた。

八月十日余日、中納言のおはする高層のまへの前栽、ことにおもしろく見渡せば、夕べ、ふるさとをおぼし出でて、簾垂を捲きあげて、つくづくとながめ臥し給へれば、人々もみな都を思ひ出でて、さまざま言ひあへる中に、心ばせある人、かく言ふ。

虫の音も花のにほひも風の音も見し世の秋に変らざりけり

と言ひ出でたる返りごとを、集まりてうそぶくめれど、ややほど経ぬれば、中納言うちほほゑみ給ひて、「げにさることなれど、おどされたることぞ多かる」とのたまはするも、すずろにはづかし。

置く露も霧立つ空も鹿の音も雲居の雁も変らざりけり

とながめ給ふを、集まりてこれをのみ誦じて、え言ひ出でずなりぬ。

（巻一、三六―三七頁）

中納言の一行が、前栽のようすから「ふるさと」、すなわち日本を思い出しつつ唱和をする箇所であるが、この要点は唐と日本との間で風景を「変らざりけり」とする点にあろう。秋の景物を並べ立てつつそれを「変らざりけり」と詠じてしまえるのは、このとき誰もが郷愁に浸っていたからではなかろうか。唐土の風景が、単に異国の「おもしろさ」や「めづらしさ」ばかりに縁取られているのではなく、時に中納言の心に働き掛けて郷愁を促す。そして、日本への「恋しさ」を懐きつつあらためてその風景をみると、日本とは「変らざりけり」というように、異国の風情も故国への情緒の中に回収されていくのだ。

叙上にみてきた唐土の風景に共通するのは、その異国性を直截具体的に語ろうとはせずに、むしろ中納言の郷愁を促すものとして描くということである。日本での、かつての日々の中の風景をおのずと投影したくなるような、或いは日本とも「変わらぬ」景物に接し、中納言の胸の裡で日本が偲ばれていくのだが、そう語ることで逆に、遠くに在る異国に来たのだ、という胸懐が深くなるのである。

しかし、もちろんのことであるが、唐土という異国に対して素直に昂揚する中納言のようすも様々にみられる。さきにあげた箇所の傍線

部でも、中納言は唐と日本とを「変らざりけり」とする詠に賛同を示しつつも、なるほどはっとさせられるようなこともしばしばだと述べている。ではこのとき、唐土の風景はどのような働きをみせているのであろうか。次節は、中納言の「目」と「心」とを通してみえてくる風景の、もう一方のありように目を向けていくことで、本作品がどのように唐土という空間を用いているのかを分析する。

三　異国を実感する風景
――再会の困難さが描き出す唐土――

中納言が、唐という異国に在って殊に心を寄せて頻繁に通っていたのは、転生後の父・唐の第三皇子とその母・唐后の住まう河陽県であった。そこで、まずは中納言がはじめて河陽県に足を運ぶ箇所を取り上げる。

三の皇子は、内裏のほとり近く、河陽県といふところに、おもしろき宮造りして、そこをぞ御里にし給へる。母后ももとろもに住み給ふ。皇子の御消息あり。かぎりなくうれしくて参り給へり。ところのさま、ほかよりもいみじくめでたく、水の色、石のたたずまひ、庭のおも、梢のけしきもいみじうおもしろし。

（巻一、三四―三五頁）

この箇所で目をひくのは、傍線部である。前節でみてきた箇所と明らかに異なるのは、「ところのさま」が具体的に書き連ねられていることである。「水の色、石のたたずまひ、庭のおも、梢のけしき」と一々事物をあげ、唐土の中で比較しても殊更に非日常的な風情であることを述べているのだ。はじめは単に「おもしろき宮」と聞いていた宮殿のようすも、待望の「皇子の御消息」をきっかけに「かぎりなくうれしく」中納言が思うと、風景が鮮明、かつ目新しくみえてくるという構図をここにみてとってもよいであろう。

そして、ここにつづく中納言と唐の第三皇子との詩の贈答の中で、中納言は「雲の浪煙の浪と、はるかにたづねわたりて、生を隔て、かたちを代へ給ひつれど、あはれになつかしく、ふるさとを恋ふる心も、たちまちに忘れぬる心」（巻一、三五頁）をこめた詩を返している。尤も、中納言が本当に「ふるさとを恋ふる心」を忘れることはなく、この直後からして日本を離れ来たことの後悔や心細さを思い起こしたり、そもそも前節でみてきたようにくり返し日本への郷愁に駆られたりしている。しかし、この詩にこめたという傍線部の思いからは、航海の苦難を乗り越えて漸く再会が叶ったことへの喜びに昂揚する中納言のようすが窺われるはずである。

十月、洞庭での紅葉賀の翌日、中納言は河陽県を再訪する。初冬の心細げな風景の中で、ふいに「おもしろき琴の声」を聞き、「うれしきことかぎりなく」思った中納言は、そのまま琴の音のする屋敷を覗きこんだ。

おはしますところは、京の檜皮の色もせず、紺青を塗りかへしたるやうに、ただおほかたの調度は赤きに、朱塗りたるさまにて、錦の縁さしたる御簾ども、かけ渡し飾られたるに、辰巳の方に、

大きなる山より滝高く落ちたるを、湧きかへり待ち受けたる岩のたたずまひ、世のつねならず。たぎりて流れ出でたる水のほとりに、いろいろうつろひわたれる菊の花の、いとおもしろきをもてあそばるるなるべし。そなたのつまの御簾捲きあげて、いみじうしやうぞきたる女房、うるはしく髪上げ、裙帯、領巾などして、いろいろ団扇をさし隠しつつ、錦を敷ける縁に、十余人ばかりならびゐたり。上手の描きたりし唐絵にたがはず。上げたる御簾のほどに、紫の唐の裾濃の御几帳うち上げて、唐組の紐、長やかにうるはしきを押しやりて、琴弾き給ふなり。

（巻一、三九頁）

この箇所は「菊の花の夕べ」として、この後も中納言が唐后を思い慕う度に、くり返して回想される象徴的な一齣である。[17] ここで肝要なのは、中納言がはじめて河陽県を訪れたときの風景を語る叙法と殆ど同じようにしてこのときの風景が描出されているということである。すなわち、ある出来事をきっかけに中納言が「うれしく」思うや否や、眼前の風景が克明、かつ殊更に非日常的で、新鮮なものにみえだしているのだ。日本の「京」との比較も交え、目の前に広がる異国情緒に富んだ屋敷のようすが実に具体的に描かれている。そしてそれは、本作品中で度々くり返される、点線部の「上手の描きたりし唐絵にたがはず」の一語に集約されるように、まさに唐という異国に在ることを、中納言自身が深く印象し直すものとなっているのである。

その上で、さらに目を向けておきたいのは、「いみじうしやうぞきたる女房」と中納言との唱和の箇所である。唐后をはじめて実見した中納言は、その美貌に「この世にかかることを見るや、と、あさましきまでおぼ」（巻一、四〇頁）えるのだが、一方で唐后に近侍する女房たちに対しても「天降りけむ乙女の姿かくやと見えて」（同、四一頁）、詩を吟詠し合っているその美声に魅せられている。そして、唐の女君たちもまた詩だけでなく和歌も詠むのかどうかが気になってきた中納言は、遂に我慢しきれずに女房の許へと歩み寄る。

ふるさとを恋ふる心を忘るるはこの花見つる夕べなりけり

と、こころみに言ひかけたれば、団扇さし出で、ただ待ち取るほど、わが世の人にことならず。

枯れでさはこの花やがてにほはなむふるさと恋ふる人あるまじく

と答へたるけはひ、言はぬにはあらざりけりと、をかしくおぼさる。

（巻一、四一―四二頁）

中納言の詠にある傍線部の措辞に注目すると、そこには転生後の父・唐の第三皇子に贈った詩にこめられた思い、すなわち「ふるさとを恋ふる心も、たちまちに忘れぬる心」と通底する心情がこめられていることが判る。もちろん、この言いようも女房に詠み掛けるにあたっての、些か大仰な文飾とみなして良いのだろう。ただ、常に気に掛かっているはずの「ふるさと」への思いを敢えて「忘るる」と言い表してしまえるほど、中納言が目の前に広がる唐土の風景に、その中でこそ接し得る唐の第三皇子や唐后との関係にひきこまれようとして

いることも確かである。事実、女房はここで「ふるさと恋ふる人あるまじく」と返事をするが、その詠の中の「この花」、すなわちこの一齣で夙にシンボリックな働きをもっている「菊」は、唐后の換喩ともなって「ふるさと」への思い以上に中納言の心象に深く刻みつけられていくのである。[18]

河陽県での、二つの類同する箇所についてみてきた。河陽県の風景は、唐の第三皇子との再会や唐后の垣間見といった中納言にとって「かぎりなくうれしく」思える出来事を通し、ひときわ鮮明なものへと変わっていく。前節で取り上げた唐土の風景が、唐そのものの異国性というよりも、それを契機として日本への郷愁を語るものであったとすると、叙上の唐土、殊に河陽県の風景とは、むしろ「ふるさとを恋ふる心を忘るる」ほど、唐という異国に在ることを強く印象させるものであった。それ故、風景を形作る風物についてもまた、接し得た喜びや驚きを語るべく、個別的にかつ具体的に描出されているのではなかろうか。ここまでの分析を通して、さらに蜀山の風景についても言及しておきたい。

蜀山は、雍州の「北のかた」[19]にあり、唐后の父の大臣の籠り住まう「おもしろき家」がある。そこは、唐の帝に后を嫁がせたものの、一の大臣の迫害のために、官位も返上して世間の柵から遁れ来た居所であった。この蜀山にスポットライトが当たるのは、山陰での中納言と唐后との「春の夜の夢」の契りを経て後である。一夜の逢瀬と不義の懐妊によって中納言との宿縁を思い知らされた唐后は、第三皇子と帝とを慮って父大臣のいる蜀山に籠もる。そして唐后不在の中、中納言を含めて三者は互いに后恋しさを慰め合うのだが、殊、中納言に至っては「山陰の女」の忘れ難さにつけても、唐后への思慕がなおのこと募ってくる。「いみじう恋しうわりなうなりたるふるさとも、この人に逢ひ見で帰らむことは、えあるまじう思ひわたる」（巻一、八三頁）うち、中納言は耐えきれず唐后と一目会うべく蜀山を訪れる。

蜀山に参りたれば、山のさま高くはげしくて、滝の落つる水の流れ、草木のなびきも世のつねならぬさまに、大臣の御すみか、いといみじくおもしろくめでたし。

（巻一、八三頁）

この箇所は、池田氏の、唐絵における山岳描写の様式に倣ったものとの指摘[20]を諸注も援用しており、たとえば、物語冒頭の「華山」でも「華山といふ山、峰高く谷深く、はげしきことかぎりなし」と類する表現が用いられている。ただ、それ以上に注目されるのは、華山が中納言をして「あはれに心細」さを懐かせる風景であった一方、蜀山に対する中納言の心情とは、傍線部のように過剰なほどの修飾語を伴った極めて明るいものであり、たぶんに晴れやかな風景として捉えられていることである。ここには無論、河陽県における中納言がそうであったように、唐后と再び会って情を交わせるかもしれないという期待が影を落としているのであり、このような昂揚が蜀山の風景への印象を形作っているものと言えよう。

そして、蜀山に在る中納言の中で度々反芻される胸の裡には、唐后の出自や父大臣の来歴とも深く関わる、日本との関係性への気づきがある。些か長くはあるが、中納言が唐后の父大臣と対座し、その翌朝

中納言が蜀山を後にする箇所をあげる。

中納言を見るより、ほろほろとうち泣きて、われ、むかし日本に渡りて、年経しありさまなど、こまかに語り給ふ。これはすべて、いささかあらぬ世の人とおぼえず、ただわが世の人にたがふことなし。もの言ひありさまも世のつねなれば、なつかしくおぼえて、物語りこまやかにし給ふに、うち解け、この后の御母に別れしほどのことなど、語り出でたるままに、いみじうあはれなり。[……]

朝ぼらけの山かげ、木暗く霧りわたるに、后の御方の妻戸押しあけて、簪うるはしく、例の絵に描きたるやうなる人々、さし出でて見送るに、立ちかへりやすらひつつ、

朝霧の峰にも尾にも立ちこめて帰らむかたもえこそ知られねとのたまへば

尾に立つや山の峡なる朝霧の晴れずはしばし立ちとまれかしと答へたるも、見し世には変らず。この大臣の、日本の人に馴れ、母宮もかの世の人なりけるゆゑに、この后の御あたりの人はかかるなんめり。一の大臣のありさま、人々のもの言ひしなんどは、見も知らず、まことにあらぬ世とこそおぼえしか、と思ひ合はするに、[……]

（巻一、八六―八八頁）

傍線部に共通するのは、「ただわが世の人にたがふことなし」や「見し世には変らず」といった、唐后周辺の人物に対する「日本らしさ」への気づきである。尤もこのような思いは、さきの「菊の花の夕べ」で唐后をはじめて目にしたときに、中納言が「母宮の御ありさまに似て、もてなしありさま、ものうちのたまへるけはひ、日本の人にいささかもたがはず」（巻一、四八頁）と唐后を評しており、また侍女たちについても同様に、「宮の御ありさまに似つつたをやかなれば」（同頁）と述べていたところにも窺い得る。そして、父大臣が日本的であればこそ「なつかしくおぼえ」るとする波線部は、同様に「菊の花の夕べ」でも唐后が日本的な美質を具えている故に「なつかしく」思えると語られていたのであった。もちろん、この点への指摘は夙にあり、[21]たとえば近時、神原萌葉氏は右の箇所を取り上げて「中納言は異国の地において少しでも日本的なものに触れると、本質の唐的な部分が見えなくなり、「なつかし」さを感じてしまっているのである」[22]としている。本稿は、風景を糸口に唐土のありようの分析を試みるものであるため、さらに深く立ち入ることは避けるけれども、たとえば、「朝ぼらけの山かげ」以下の風景の叙述は、『源氏物語』「若紫」巻の北山や[23]「橋姫」巻の宇治の山荘の風景が、侍女との贈答を媒介に影を落としていよう。ただ、点線部の「例の絵に描きたるやうなる人々」をみおとしてはなるまい。「例の」の一語によって「菊の花の夕べ」で目にした侍女の新鮮な印象がここで再び喚起されるとともに、蜀山の異国性はこの一点においても決して損なわれずにあることが窺えよう。そして、そのような風景の中で話を聞いてかんじた、父大臣と唐后との日本との繋がりが、却って中納言の目にきわだって魅力的な性格として映るのではなかろうか。

その上で興味深いのは、破線部にある一の大臣家のありさまである。

中納言の胸中にあって唐后と父大臣と対峙させられるとき、「まことにあらぬ世とこそおぼえしか」とまで評される一の大臣家について、さいごにみていく。

中納言が一の大臣家を訪れるのは、五の君の恋煩いを慰めるべく催された花宴の折りである。一の大臣直々の招待で赴いたその家のようすは、「いみじく造りかざられたるさま、内裏にことならず磨き立てたり」（巻一、五八頁）というものであった。そして、どうにか娘の五の君と会わせようとする一の大臣の、「ただ入れに入るる」というほどの執拗な勧めもあり、遂に断りきれずに御簾を窺った中納言は、そこで五の君と対座することになる。

内のしつらひさらにもいはず、かかやくばかりにて、女房五十人ばかりいみじうしやうぞきて、髪上げ、団扇さしつつ、柱ごとに火ともしわたして並みゐたり。むすめの君は、帳のかたびらすこし捲き上げて、団扇を手まさぐりにして、見出でて臥したり。めづらかに、をかしうもあさましうもおぼえて、いかがはせむ、河陽県の后の御やうにだにあらばしも、身のいたづらにならむもおぼえずかし、とおぼして、帳のもと近く寄りて、ものなどのたまふに、恥ぢけたるけしきもなし。火影に見れば、十七八ばかりにて、白うをかしげにはあれど、后の御ありさまにはたとへやるべきかたもなし。答へするも聞き知らぬ言葉がちにて、まことにあらぬ世の心地するに、かばかりもなぞや、とすさまじくて、床に押しかかりつつ、琴をすさみて、いとあはれにおぼしければ、[……]

（巻一、六一―六二頁）

とりわけ唐后との比較において五の君の劣り様が波線部でくり返し述べられていく。その極めつけは太線部であり、さきの蜀山での中納言の胸懐の淵源には、このときの五の君に対する鼻白んだ興ざめな思いがあるものと言い得る。たしかに傍線部において、これまでにもみてきたような「唐国らしさ」を窺わせる叙述もあるが、そこに一語も「おもしろし」や「めづらし」が用いられていない点は注目に値しよう。したがって、昂揚を誘う出来事もないままみつめる唐土の風景とは、「まことにあらぬ世の心地」という語が端的に表す通り、本当に〝異国〟的であまりにも気遠く、中納言にとっては殆ど情緒を掻き立てるものとはなり得ないのであった。しかし、一の大臣家の五の君を中納言が再評価する箇所がある。それは、帰国が迫る中、五の君から送られてきた文によって再訪した折りのことである。

さらに昼の文、めづらしうおぼされければ、一の大臣の御もとに、忍びて立ち寄り給へり。深き夜の月、浮雲だになびかず澄めるに、はるかに広き池の中島に作りかけたる楼台に、三四五の君、琴どもかき合はせて、月をながむるほどなり。やがて、「こなたに」とて入れたてまつれば、中島の汀より横たはれ生ひ出でて、楼台の上にさしおほひたる紅葉の、着てもまことに夜の錦かと見えたるに、御簾捲き上げて、几帳ばかりをうちおろして入れたてまつれり。つねはいかがあらむ、おもしろき池の上、紅葉の影にて、いとうるはしくしやうぞき、髪上げてゐたる、月かげともいづれと

もなく、絵に描きたるやうなり。三の君琴、四の君箏の琴、五の君琵琶、かき合はせたる声々、いづれともなくおもしろし。

（巻一、一二〇頁）

さきの箇所と較べても、殊、傍線部の風景の叙述が「おもしろし」の形容詞を伴って詳細になるとともに、点線部の「絵に描きたるやうなり」の喩も用いられており、ここでの一の大臣家のようすは明らかに肯定的なものへと変容しているのである。この後、中納言は「日本の山より出でむ月見てもまづぞ今宵は恋しかるべき」（巻一、一二一頁）の詠をもって五の君と贈答し、そして五の君の返事と琵琶の音につけても、「などて月ごろ聞きならさざりつるぞと、これさへあかぬもの思ひ」（巻一、一二三頁）が付け加わったとして物語は閉じられる。「ふるさとを恋ふる心を忘るる」というほどではないにしても、中納言の胸中に五の君との贈答が思い出として深く刻まれたようである。

しかし、どうしてここで、中納言は五の君を再評価するに至ったのであろうか。結論をさきに言ってしまえば、帰国が間近に迫る中で、五の君でさえも再会困難であるという、日本と唐との間にある物理的な距離の遠さに思い至ったことが、中納言をしてそのように思わせたのだと推測できる。そして、中納言のこの「遠さ」への気づきこそが、唐土の風景をいかようにも変じてみせていたのであり、またそうした点にこそ、異国という舞台の核があるものと言い得る。思えば、河陽県の風景も、困難を極める渡航の果ての、転生後の父・唐の第三皇子との〝再会〟の「うれしさ」に縁取られていたのであり、「ふるさとを恋ふる心を忘るる」ほど鮮烈なものとして描かれていた。唐后もまた、帰国すると忽ち再会困難な関係になるから、「この人に逢ひ見で帰らむことは、えあるまじう」とまで思うのであり、それ故に唐后の居所もまた異国に在ることを殊にかんじさせる風景として中納言の「目」には映ったのだろう。このように、異国という舞台を本作品が方法として用いることで、他作品にはみいだせない斬新な展開と人間関係を語り得たのだが、その筋書に奥行きをあたえる主人公・中納言の胸の裡を映し出す装置として、唐土の風景は濃淡様々に描出されているのである。

四　おわりに

本稿では、『浜松中納言物語』巻一の唐土のありようについて風景を糸口に再検討を試みた。日唐間の、こんにち以上にあったであろうその「遠さ」は、在唐中の中納言の胸の裡に常に影を落とす。それは時に郷愁を、時に昂揚を誘う心因となるのだが、中納言の、そうした異国を舞台にしてはじめて成立する人間関係と、その中で萌芽する特別な心情とを語るのに、物語は唐土の風景を巧妙に描き出していたのであった。単に風物による「唐国らしさ」の演出を一方で試みつつ、景情をかさね合わせて唐土を形作ることで、本作品の、異国を舞台にするという方法はストーリー展開の中で活きてくるのである。些か素朴な結論へと分析は収斂していくようでもあるが、ただ従来論のように唐を描くという営みそれ自体を、作者、或いは作者の知識とその基盤へと直結させる捉え方には、問い直すべき点が未だ残されているも

のと言わざるを得ない。

このように本作品の唐土という舞台を捉えてみると、『無名草子』[24]の評言が思い起こされる。

『みつの浜松』こそ、『寝覚』『狭衣』ばかりの世の覚えはなかめれど、言葉遣ひ、ありさまをはじめ、何事もめづらしく、あはれにもいみじくも、すべて物語を作るとならば、かくこそ思ひ寄るべけれ、とおぼゆるものにてはべれ。すべてことの趣めづらしく、歌などもよく、中納言の心用ゐ、ありさまなどあらまほしく、この、薫大将のたぐひになりぬべく、めでたくこそあれ。

（二三五頁）

傍線を付した箇所のように、『浜松中納言物語』は物語創作の模範ともなり得るというひじょうに高い評価を得ているが、それというのも、当然、渡唐物語を果敢にも試みたことに一因があるだろう。唐という異国を描くにあたって、じっさいに目にしたことがなくとも、また準備できる資料にたとえかぎりがあったとしても、主人公・中納言を巧みに操作することでいかようにも物語の空間を形作ることは可能なのであった。そのような工夫の一端が、本作品の風景をめぐる叙述に明らかに窺え、その景情織り交ざる行文が当代の読者をして新鮮な興趣を催させたのだと思われる。もちろん、『浜松中納言物語』における唐土の風景とは、作者の中国の故事に関する知識や唐絵、或いは中国にまつわる文芸（たとえば、散逸物語の『唐国』や『長恨歌』、『長恨歌伝』、また『長恨歌』を翻案したという散逸物語）、『うつほ物語』、『源氏物語』などにインスピレーションを得た想像力がなければ、描き得ないものであったことは確かである。そうした工夫は、時に充分に異国性を揺曳した展開を作り出してもいよう。ただ、唐土のありようが精確かどうかを論うのは、やはり作品を豊かに繙く営みとは言い難い。本作品の成した渡唐物語への挑戦とは、むしろ『うつほ物語』をはじめとする幾つかの先行物語が展開した「唐」という物語空間の再開拓の試みとしてあり、創造とイメージとの交歓を狙う戦略として志向されたのだと考えても良いのではなかろうか。

本稿では、紙幅の余裕から巻二以下の物語世界との関わりについて殆ど言及する余裕がなかった。巻一が語るところの渡唐物語は、帰国後も中納言の胸中をくり返し束縛しつづけるのであり、したがって以後の筋書との有機的な繋がりを繙くことが、本作品の「唐土」という舞台のありようをいっそう立体的に炙り出す方法であろう。さらに、『浜松中納言物語』との濃密な影響関係がある『松浦宮物語』のように、「異国」という要素を共有する作り物語同士の相互連関についても思い合わされるところである。厖大にあったはずの平安・鎌倉時代の物語文芸をめぐる情況に鑑みると、唐のみならず史実として交易のあった「高麗（渤海）」のような周辺国を舞台にする物語も有り得たのだろうかと想像が掻き立てられるのであるが、[25]このような文芸史的な展開も含めた『浜松中納言物語』における「唐」をめぐる分析は、爾後のとりくみとしたい。

※『浜松中納言物語』本文は、池田利夫校注・訳、新編日本古典文学全集27『浜松中納言物語』（小学館、二〇〇一年四月）を用い、本稿

で本文を使用するときは、その頁数を示した。なお、私に傍線・符号・注等を付した箇所がある。

《注》

（1）藤岡作太郎著『国文学全史２　平安朝篇』「浜松中納言物語」（秋山虔校注、東洋文庫247〈平凡社、一九七四年二月〉、一八四頁。なお、松尾聰「浜松中納言物語の唐の描写について」（『文学』第一巻第七号、一九三三年一〇月）、山川常次郎『『御津の浜松』に於ける日支関係」（『古典研究』第六巻第六号、一九四一年六月）も参照した。

（2）池田利夫著『更級日記　浜松中納言物語攷』（武蔵野書院、一九八九年四月）、第八章「浜松中納言物語に於ける唐土の問題」、三八二頁。初出は、「浜松中納言物語に於ける唐土の問題」（『芸文研究』第一〇号、一九六〇年六月）。

（3）須田哲夫「浜松中納言物語に於ける作者の唐知識論」（『文学・語学』第五号、一九五七年九月）。須田氏は、作者の唐知識の粗雑さを指摘する旧来の議論に対し、作者が孝標女であることを理由に疑義を呈した上で、「「浜松」の作者の唐土の知識に就いて（一）その順路に於ける地理知識と（二）風土習慣描写とに分けて考えて来たのであるが、いずれにおいても作者はその執筆に際してはその知識において相当な用意を以って叙述を進めた事が明らか」だと述べている。また、『更級日記』にみられる種々の「伝説」にも焦点を当て、「物語の構成に於ける描写内容は作者内部の伝説愛好の精神によって裏付けられている」とも指摘する。

（4）小塩慶「国風文化期における中国文化受容　――異国描写を手掛かりとして――」（『史林』第一〇〇巻第六号、二〇一七年一一月）。小塩氏は、孝標女が家系において漢籍利用に有利であっただろうという推測を留保しつつも、「『浜松中納言物語』の中国知識の背景にある、本格的に漢籍を学ばなくとも類書的知識や和文の物語によって中国の故事をある程度知ることができた、当時の社会状況」に注目し、本作品が成した異国像の形成の一端を明らかにしている。なお、当時の貴族女性における漢詩文素養の程度については、山本淳子著『紫式部日記と王朝貴族社会』（和泉書院、二〇一六年八月）、第三部第七章「一条朝における漢詩文素養に関する社会規範と紫式部」（初出は、『人間文化研究』第三六号、二〇一六年三月）に詳しい。

（5）注（3）、（4）以外にも、同趣の論に、広瀬昌子「浜松中納言・松浦宮物語の地名表現について」（『甲南国文』第三九号、一九九二年三月）がある。広瀬氏は、『浜松中納言物語』の作者を孝標女とする前提には立っていないようではあるが、航路や日唐間の所要日数、距離などに焦点を当て、作者が「遣唐使」に関する記録を参考に物語を創作したものと推論している。また、「作者が舞台となる異国の土地を、どういう言葉で表現しているかを調査してみた結果、「浜松中納言」の方が、「松浦宮」よりも形容している地名が多く、また形容している内容の表現密度が〝濃い〟と分かった」とも述べ、殊、唐の地名表現に、異国を物語世界の舞台として設定した工夫の痕跡が顕著に窺われるものと指摘する。

（6）丁莉「『浜松中納言物語』における「唐土」　――知識（knowledge）と想像（imagine）のあいだ――」（李銘敬・小峯和明編、アジア遊学

197『日本文学の中の中国』〈勉誠出版、二〇一六年六月〉）。丁氏は、『浜松』の作者は、たとえ実体験が伴わなくとも、知識と想像で唐土を舞台とする物語を作り上げた。千年前の一女性として、未知の異国の地を描く際のハンディは想像に難くない。［……］しかし、作者はそうしたハンディを克服して、初めての異国物語に果敢にも挑戦した。源氏物語の巨大な影響下にあっても、源氏物語にはない新しい趣向、新鮮な魅力を求めようとしたのだろう」と述べている。

（7）本稿における「風景」の用語については、高橋文二著『風景と共感覚――王朝文学試論』（春秋社、一九八五年九月）の定義に拠るところが大きい。高橋氏は、著書の序「王朝文学世界の風景と情念」の中で「ここで風景とは単なる自然の景観の謂ではなく、心象としての風景に近い。［……］景観としての自然の印象が、［……］形なき心を縁取る形として記憶の底に沈み、折々は蘇って今の心を揺する。［……］そういった心の形とも言うべき自然の印象を総じて「風景」として捉え」（圏点ママ、三頁）ている。本稿もまた、主人公・中納言の心情を縁取るものとみて、本作品の唐土の風景のありようを分析するというアプローチを採る。

（8）池田氏、注（2）前掲著書。また、塩田公子「浜松中納言物語と松浦宮物語――「唐国らしさ」をめぐって――」（糸井通浩・高橋亨編『物語の方法――語りの意味論――』〈世界思想社、一九九二年四月〉所収）に指摘がある。なお、本稿における「唐国らしさ」という語は、塩田氏論にある術語を援用したものである。

（9）王子猷の故事（『晋書』、『唐物語』など）との関連に従い、諸注「山陰」に改める。『物語後百番歌合』二十五番・右の詞書に、「もとの国に帰りなむとての秋の夕べ、女王の君が山陰の家に立ち寄りて消息すれど、つれなければ」（本文は、樋口芳麻呂校注、岩波文庫『王朝物語秀歌選（上）』〈岩波書店、一九八七年一一月〉に拠る。傍線は私に付した）とあり、以上も「さんいふ」を「山陰」に正す上での徴証とする。なお、大津有一「濱松中納言物語雑考」（『国文学解釈と鑑賞』第四巻第一二号、一九三九年一二月）、小松茂美著『校本濱松中納言物語』（一九六四年九月）も参照した。

（10）小塩氏、注（4）前掲論文

（11）土方洋一氏項目執筆「おもしろし」（秋山虔編『王朝語辞典』〈東京大学出版会、二〇〇〇年三月〉）。なお、松尾聰著『源氏物語を中心とした「うつくし・おもしろし」攷』「中古の作品における「おもしろし」――『源氏物語』を中心にして――」（笠間書院、一九七六年一二月）には、『源氏物語』から帰納される「おもしろし」の語義について、「限られた具体的な対象に接してひきおこされる「明るく晴れやかなきもち」をあらわすことば」（圏点ママ、一七一頁）とあり、その語義は『源氏物語』と成立時代の近接する諸作品の用例についても殆ど例外なく守られているという。「特殊個別的な」、或いは「限られた具体的な対象」である、唐という異国の風物に対する中納言の心情を窺わせる鍵語となっている。

（12）大野晋氏項目執筆「めづらし」（大野晋編『古典基礎語辞典』〈角川学芸出版、二〇一一年一〇月〉）を参照した。

（13）市古貞次著『中世小説の研究』（東京大学出版会、一九五五年一二月）、三二六―三二七頁

（14）中西健治著『浜松中納言物語全注釈　上巻』（和泉書院、二〇〇五年

二月）、八頁

（15）『和漢朗詠集』は、川口久雄著『和漢朗詠集全訳注』（講談社、一九八二年二月）を参照した。この詩節は、『江談抄』や『古今著聞集』巻第四などに、入唐僧・奝然が自作と偽って唐人に披瀝するという著名な小話の材として載る。本稿で言及するところの説は、群書類従本『江談抄』巻第四にみえる、「蒼波路遠雲千里。白霧山深鳥一聲。橘直幹。石山作。」の、傍線を付した注の内容を指す。ただ、この言述が史実か否か、またそもそも当時の貴族社会が共有するものであったのかどうかについてまでは十全な検討が及んでおらず、爾後さらなる分析を試みたい。

（16）「白山」について、『新編全集』五四頁・注三では、『更級日記』を参考にあげ、「加賀と飛騨の国境にある今の白山。『古今集』以来、主に雪の消えない山として歌に詠まれる」とする。一方で、『浜松中納言物語全注釈』には、「「白山」といえば、日本では「こしのしらやま」と詠まれる越前国の歌枕ではあるが、ここでは関わりはない」とし、浜松中納言物語の会が校注する『浜松中納言物語 巻一　注釈』（二〇一二年五月）はこれを支持して「普通名詞であろう」とする。本稿も普通名詞とみてはいるが、一方で断言を避け、郷愁に駆られる中納言が梅の盛りにある山を「白き山」とはせずに「白山」とみる、そうした風景の描き方が、あとに来る独詠とも響き合うことで「越の白山」をイメージさせるという効果があるようにも思うが、この点はさらに検討を試みたい。

（17）『浜松中納言物語 巻一　注釈』の二九頁「【参考】「菊」と「琴」の女君、唐后」に、「この物語の女主人公唐后は、この区分に見える「菊」と「琴」の女君であり、これらはこの物語を一貫して貫く「回想のコード」として、常に視覚（もしくは嗅覚）と聴覚とが両者渾然一体となって有機的に物語を紡いでゆくこととなる」と指摘する。この前提には、神田龍身著『物語文学、その解体　――『源氏物語』宇治十帖以降』（有精堂出版、一九九二年九月）のⅧ章「方法としての内面――後冷泉朝期長篇物語覚書――」の議論があり、その中で神田氏は『浜松中納言物語』と『狭衣物語』との二作品の間で共通する要素として「「回想」ということが目的化されてきている」ことをあげ、「浜松中納言も狭衣大将も、［……］体験それ自体ではなく、過去に向かって回想するためにこそ生きているのである」（二五三頁）と述べている。

（18）中納言と唐后との出会いを契機としてみいだされる「菊」の表現をめぐっては、久下晴康著『平安後期物語の研究　狭衣浜松』「唐后転生への道　――持続する菊の心象――」（新典社、一九八四年一二月）に詳しい。

（19）蜀山が雍州の「北のかた」にあることについて、『うつほ物語』「俊蔭」巻で俊蔭女と仲忠の住まう「うつほ」が京の「北ざま」の山中にあること、また『源氏物語』「若紫」巻の舞台が「北山」であることとの関連を、横溝博氏からご教示いただいた。蜀山の風景を「若紫」巻を下敷に描出したり、唐后と中納言との間の不義の男君の出産を「すべて変化のことなり」（巻一、八八―八九頁）と語ったりするのも、この「北のかた」という一語が負う機能として捉え得る。叙上のような平安京の地理を基準とする物語の想像力に関し、王朝物語には様々な形で同趣の仕掛けが施されているはずであり、このことに

ついては爾後も検討にとりくみ、稿をあらためて論じていきたい。

（20）池田氏、注（2）前掲著書

（21）神田龍身「『浜松中納言物語』幻視行　――憧憬のゆくえ」（『文藝と批評』第五巻第五号、一九八〇年一二月）

（22）神原萌葉「『浜松中納言物語』の唐国観の再検討」（『清泉語文』第七号、二〇二〇年三月）

（23）すでに『新編全集』に指摘がある（八七頁、注九）が、この辺りの蜀山の風景は、『源氏物語』「若紫」巻の、北山の尼君の弔問を理由に紫の上の許に赴く、その翌朝の源氏の家路を描く箇所と表現が近接する（新編全集『源氏物語①』「若紫」巻、二四六頁）。

（24）『無名草子』の本文は、久保木哲夫校注・訳、新編日本古典文学全集40『無名草子』（小学館、一九九九年五月）に拠る。

（25）作り物語の「唐土」、「高麗」の用例に焦点を当てた議論に、金孝淑「権威付けの装置としての「唐土（もろこし）」と「高麗（こま）」　――『うつほ物語』『源氏物語』『狭衣物語』を通して――」（田中隆昭編『日本古代文学と東アジア』〈勉誠出版、二〇〇四年三月〉所収）がある。王朝物語を通史的にみていくと、徐々に「唐」や「高麗」が異国としての実態を伴わなくなり、『狭衣物語』に至って栄華や尊厳を漂わせる絶対的な権威として図式的記号的に用いられるようになったと指摘する。一方、成立時代の近接する『浜松中納言物語』は、殊、中納言の心情を媒介に、「唐」を極めて有機的に描こうとしていることは、本稿でみてきたように風景の叙述一つをとっても明らかである。それ故、本作品には「権威付けの装置」としての唐土のあり方は当たらないものと思えるが、このことについては既に中西健治「日唐の綾なす異郷――浜松中納言物語」（『国文学』第七一巻第五号、二〇〇六年五月）に言及がある。

そうなると、たとえば散逸物語に描かれていたであろう「異国」とは、どのようなものであったのだろうか。『浜松中納言物語』のように自ら進んで異国に旅立つ物語もあれば、図らずも異国に流浪するという物語も有り得たであろう。異国との交易を描いたり、異国人を主人公としたり、また、異国の名称をある種の、まさに「権威づけ」の修飾語として用いるような例はたぶんにあったものと推測し得る。もちろん、物語を書く上で参考にする資料の多寡や当時の貴族社会での異国に対する態度も、作品世界に取りこむかどうかやその描き方に影響するのであろうが、その点で『浜松中納言物語』が、これまでの表現伝統を負いながらも、あらためて唐土を舞台にしたという一事において、後進の文芸に成した影響は相当に大きかったものと思われるのである。

【付記】

本稿は、令和三年度ＪＳＴ次世代研究者挑戦的研究プログラム JPMJSP2114 の支援をうけたものである。

また本稿は、令和三年度　東北大学文芸談話会　研究発表会（オンライン開催、二〇二一年二月二十二日）における口頭発表「唐土の風景　――『浜松中納言物語』巻一論　――」に基づく。席上、ご指導ご批正いただいた方々に、誌して感謝申し上げる。

――こしだ・けんすけ／博士課程後期一年――